

大田さんの思い出

榊 達雄

(名古屋芸術大学)

大田直子さんには、日英フォーラムおよび日英教育学会において、いろいろお世話になってきましたが、いくつか思い出すまま記すことにします。大田さんからの依頼に基づき、2009年度日英教育学会大会会場をお引き受けしたことが、ついこの間のこのように思います。研究発表会場のほか、懇親会会場も見つけてほしいとのことでしたので、「徳重・名古屋芸大」駅の近くに、大きな部屋はないが、会場として可能な飲食店が1軒あるほか、大学の食堂も可能であると返事をしました。大田さんから、大学生協の食堂でもよいと返事が来ましたので（大学の食堂は大学生協の食堂という先入観があるのかもしれませんが）、名古屋芸術大学にはまだ生協はなく、業者の経営ですが、同僚の経験によると割と値打ちであるようですと伝えておきました。

会場の教室には、パワーポイント等のほかマイクも使用できる装置がありましたが、使用できるマイクは二つだけでしたので、マイクは3つ使用できるようにしてほしいとの要望に応えるため、事務に頼んで、移動できるマイク装置を会場に運んでもらいました。ところが当日、自由研究発表のとき、発表者の声が聞き取りにくいようでしたので、発表者の使用している移動用マイクの音を大きくしたら、声は大きくなりましたがかえって聞き取りにくくなったため、大田さんからすかさずマイクの音を小さくして下さいと会場全体に聞こえる声でいわれて、マイクの音を小さくしたことを覚えています。

大田さんは、いつもこのように学会の進行にも、常に気配りをしていたのだと考えます。そして、いつものように学会の受付をし、また歯切れよく通訳をし、そのうえに自由研究発表も、「現代イギリス教育改革の本当の目的はなんだったのか」というテーマでなされました。前年の学会における議論を踏まえ、明確な論点を提示されていました。ですので、訃報はまさに驚きというほかありませんでした。

時間的には前後しますが、大田さんが東京大学大学院において提出したイギリスの教育行政制度に関する博士論文に対して、1991年2月に博士の学位が授与されたことは、関係者の方を通して知りました。その論文をもとに出版された書物である『イギリス教育行政制度成立史——パートナーシップ原理の誕生——』は、まず先行研究を批判的に検討し、明快に問題点を指摘していることが印象的です。そして、「イギリス教育行政制度を特徴づけるパートナーシップ原理の構造と基本的性格を、1902年教育法および1904年教育法の本格的な歴史的研究を通して明らかにするという課題は、依然として、残されたままになっていること」を問題意識として、全体

を論述しています。民主的な教育行政制度のモデルといわれるイギリスの「パートナーシップの原理」について異議をとらえ、「1902年教育法および1904年教育法について批判のメスをいれることにより、「少なくとも、親・国民による教育の民衆統制を鋭く排除するものとして、このパートナーシップの原型が誕生してきたこと」を明らかにしています。

この書物は、日本教育行政学会においても注目され、1993年に同学会最初の「奨励賞」を授与されました。このことは、大田さんのイギリス教育研究者としての名前を広く知らしめることになったと思われます。

また私事ですが、2002年2月、ある科学研究費研究のイギリス調査で、研究分担者としてシェフィールド大学のマカロック (G. McCulloch) 教授を訪問する際には、同教授がその前年の日英教育学会におけるゲストでしたので、大田さんにあらためて同教授への紹介をお願いし、快く引き受けてもらいましたことも、思い出のひとつです。

シェフィールド大学は、私が名古屋大学における在外研究で1986年から87年にかけて9ヶ月間滞在したこと以上に、やはり大田さんからの紹介があったが大きな力となり、同教授へのインタビューは非常に効果的に行うことができました。コンプリヘンシヴ・スクールへの中等教育改革後に生じている問題や課題のほか、専門職としての教職についても、いろいろ同教授の専門的見解をお聞きすることができました。

日英フォーラム・日英教育学会を通じて、参加のため受付に行きますと、必ず大田さんにお会いすることができましたし、総会では大田さんから会計報告等をお聞きしました。大田さんはいつも舞台裏でフォーラム・学会を支えておられ、イギリスから招く研究者について、交渉から日本における世話に至るまで配慮され、そして必要に応じて通訳としてあるいは発表者として、舞台上に登場されました。

あらためて大田さんに感謝を申し上げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。